

研究者の立場から

蚕糸科学研究所 研究員 青 木 昭

はじめに

絹を身に着けて楽しむ人が多くなってきた。輸入絹製品のあふれるなかの豊かさである。国産品の需要を確保するには、海外では作れない商品を市場に出していかなければならない。

現状ではコストの低減は極めて困難である。低価格帯は海外に任せながら、高級品の分野、高価格帯に新しい市場を作り出す必要がある。ブランド化の狙いもここにあり、それは「高付加価値」商品の開発によって可能である。

これにより商品の特徴を明確にしてその顔をはっきりさせ、信頼のおける品質を提供することによって販売が促進されることになるだろう。

差別化を基調とした素材開発と品質の保証が高付加価値化を推進する原動力と考えられる。以下それらを話題の一端としたい。

1. 素材開発の方法

素材開発の研究は、絹の本質を見極めて出来るだけ広範な用途にその特質を反映させる方法の開発である。今日まで進められてきた素材開発は次の3つの方法で、それぞれ成果をおさめてきた。

- ① 特徴ある蚕繭を生産する。
- ② 糸の構造に特徴をもたせる。
- ③ 他繊維と複合する。

今後も研究面からの多様な素材メニューの提示が商品の開発に役立つと考えられるが、商品価値に結び付けるには、消費者の誰にも判る違いを示さなければならない。一層の差別化が求められている。

2. 期待される研究課題

消費者の潜在的な要求を商品に具体的に表現して提供することが素材メーカーの役割である。健康・環境・文化をキーワードとして、従来の絹がもつ感性・機能

を超える新たな価値の創造が今日の課題であろう。

① 最近、衣服に対する健康志向が強まっている。そのなかで絹に対する期待は極めて強い。衣服気候の快適性の追求から、さらに絹と健康との関係の解明に高い関心が寄せられている。

綿、ウールそして絹も、生体の保護が目的に発生した繊維である。基礎的には有用な未利用機能の検出が期待され、応用面では保健・衛生機能の付与に向けて絹に適用できる加工方法の導入が待たれている。

② 衣服には外観の美しさ、快適な着用感などが求められる一方で、様々な環境や生活条件に適合する利便性も欠かせない。「シワにならない」「汚れにくい」「洗濯しやすい」など、さらなる改善が必要である。これによりスポーツ、レジャー、寝装具など、絹が疎遠であった分野に新たな用途を開きたい。

③ 消費者の価値観や好みが絶えず変動するなかで、素材に関しては「本物」志向が根強い。長い歴史に育まれた味わいを新鮮な形で表現することがこれに応える方法であろう。如何にして伝統の継承に貢献するか悩みは大きい。

④ 非衣料分野では不織布、絹紙として花卉・食品等の鮮度保持、化粧用材料への利用や、シルクトウから寝具への展開などがある。また、食品や微粉末など非繊維としてユニークな用途も開けてきた。蚕糸業を側面から支えるベンチャービジネスとして大きく育てていきたい。

3. 品質の保証

「高付加価値」商品の条件の一つが品質の保証である。そこには科学的根拠に基づいた納得のいく品質基準が必要になってくる。

絹製品の主力は生糸を原料とした定番品である。戦後、生糸品質と織物との関係の研究は、靴下から織物への転換期、多条機から自動機へ、そして経済の高度成長期、続いてオイルショック以降へと、その都度強力な対応がなされてきた。

最近の機業地の調査において、生糸に対する要望はコスト問題は別として、共通して経緯の出ない生糸であり、それは「切れない」「節がない」「ムラがない」経糸用生糸の供給である。繭・生糸・織物相互の品質には、常にその時代を背景とした問題をはらんでいる。まさに「古くて新しい」研究課題といえよう。

最終消費過程の性状に結び付く繭・生糸・織物の品質の評価と基準の設定は「取り引き」における信用の裏付けとなり、新商品の開発に当たっては、川上から川下に至る一貫した「取り組み」に威力を発揮するものとなろう。